

## 巻 頭 言

副支部長 伊東敏幸（北海道科学大学建築学科）

1959年5月に設立された北海道支部は、今年で59年目を迎え、雪氷および寒冷に関わる研究者や実務者、及び北海道で生活する人々における交流や情報発信の場として多面的に機能して参りました。北海道支部からの情報発信を担う重要な機関誌であります本誌「北海道の雪氷」は1982年5月に創刊されており、本号は第36号となります。創刊号から掲載されている支部研究発表会の講演要旨を顧みますと、創刊当初は10編ほどの掲載でしたが、第10号以降に20編ほどに増え、第20号以降で20数編、第30号以降になると空知地区が豪雪となった年の第31号の49編を最多に毎年30数編が掲載されています。また、その研究内容をみますと、当初は実測が主でありましたが、近年では様々な再現実験や数値予測などの研究報告が多くなっています。特に、自然災害に関わる分野では、過去から蓄積されてきた観測データが推定分析に有効に活用されているかと思えます。私も第11号から支部研究発表会へ参加しておりますが、近年では人々の日常生活に関わる研究テーマも増え、自然科学的な評価ばかりではなく、社会科学的な評価が不可欠になってきていることを実感しています。人口減少社会を迎えるなか、北海道にも過疎化・高齢化の地域が多く散在していますので、「北国の豊かな暮らし」を再考・再認識する必要があると感じています。脚本家の倉本聰さんがドラマ「北の国から」を通して唱えた「ここには自然がある。自然から頂戴しろ。」は、北国の豊かな暮らしに繋がる文化的な教訓なのかも知れません。

次に、現在の北海道支部事業に関してですが、本誌の巻末に掲載していますように、公益社団法人としての使命となる社会貢献事業として、地域講演会の開催およびサイエンスパークへの出展を本年度も実施しております。これらの事業は北海道支部のオリジナルイベントとして継続的に行われていますが、これら事業は担当理事やその協力者のご尽力によって実現されていますので、ここに改めて関係各位に対し感謝申し上げます。支部理事会におきましても雪氷教育を充実させようとの意見が多くありますので、今後の支部事業において充実すべき活動として具現化する所存ですので、会員各位からのユニークなご提案ならびにご協力をお願いします。

さて、雪氷工学の研究を進めるうえで、フィールド実験は有効かつ不可欠な研究手法となりますが、自然下での実験では諸要因が不規則に影響することから、要因特性の評価も難しく、実験に長期間を要することが課題かと思えます。このような現状のなか、北海道科学大学に大型の自然雪風洞実験装置が導入されました。支部会員連携のもとでその実験装置が活用され、主に吹雪に関わる雪害対策の研究成果が、本誌に掲載されることを期待します。

また、翌年の2018年度雪氷研究大会は、北海道地区が担当となっており、既にその準備委員会が発足し、会期を2018年9月9～12日、会場を北海道科学大学E棟として開催する予定となっています。9月には大会実行委員会を立ち上げ、翌年の大会準備を進めることとなりますが、自然の雪氷に恵まれた北海道らしい研究大会を実現させようと思えますので、支部会員の皆様のご支援とご協力をよろしくお願いします。